

③『今東光(全年譜)刊行後の新収事項・書誌訂正一覧』

(編年式。河出年譜記載の作品で、その後実見したものを含む。データは2024年3月26日現在。ゴシック体はそれ以降の新収・訂正事項で9月20日現在のデータ。なお下巻1088〜1094ページ所収の補遺・訂正事項は除いている。)

2025年1月以降の新収事項・書誌訂正等については⑥を付して区別した。

・凡例6ページ5行目の最初の句点を削除。

◎1908年5月27日の項の信「の多摩園改葬日は、1930年6月27日が正しい(今家旧蔵信口遺影背面書き込みにより判明)」。

1914年4月の項の『文章世界』読者通信にある「若林旅一郎」は後の重話作家大木雄二(本名雄三)の当時の筆名(回想「文士の決闘」依拠)。

1917年1月3日 日本郵船香取丸でケープタウンに向けて欧州航路を航海中の父・武平から東光・文武宛に年賀カードが到来(※宛先住所記載なし)。

1918年6月の『須藤泣花について』の項で以下を追記。須藤について東光は幻視の画家関根正「補遺」の中で、上海の開業医の息子で早稲田大学文科に通う学生だったと紹介。須藤は関根の頼みで関根の代表作『信仰の悲しみ』のモデルとなった田口真咲を本郷真砂町の自宅に預かった、と記している。

1920年2月14日 野口米次郎の招きで日本滞在中だったアイルランド出身の詩人ジェイムス・カズンズ(3月28日離日)、鈴木大拙、ジョン・プリンクリー、『ボンバインクロナル』紙特派員サバルワル、そして父・武平ら21名で神智学協会東京支部を設立。カズンズ離日後は鈴木が支部長を務めた。なお武平は同年10月同支部会計職を辞職、同支部も1923年には消滅したという(アイルランド神智学徒のアジア主義?ジェイムス・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波)橋本

順光、『神智学とアジア』永進一、莊千恵ら編(青弓社の記述に依拠)。プリンクリーについては上巻240ページ下段を参照のこと。東光とプリンクリーは1920年当時から面識があったと思われる。

1921年8月26日午前、近衛直麿(当時『象徴』同人を伴い鈴木彦次郎の盛岡の実家を訪問、投宿。27日朝、弘前へ。東光は『新思潮』が第4号発行(この年7月)以降、刊行の見込みがないことから「再興」案を種々提案、9月発行をもちかけた(実際の第5号は1922年3月発行)。

1923年12月25日の項の松翠閣には勝沢清造、大木雄二も同所に居住、東光は大木を通じて秋原恭次郎を知ったという(回想「文士の決闘」)。

1925年9月発表の随筆『愛妻物語』その他(の題名は『愛妻物語』其他が正しい)。

1926年5月小説『海の響宴』(草稿)。

1926年6月 妻・文子と伊勢志摩を旅行。「同行に今井氏兄弟あり」(鳥羽の海)。

1926年(月不詳) 短文「鳥羽の海」(誌名不詳)。

1927年1月1日随筆「新聞小説と『愛経』」(出版タイムス)。

◎1927年11月随筆「私から見た草間實」(阪妻画報)。

1927年か 連載評論「一九二六年から一九二七年へかけての感想」(紙名不詳―全2回) 発表。「一九二三年の九月、関東の大震災直後の数日、芥川龍之介氏と僕と川端康成君と三人で、その被害状況を視察し歩いた時に、芥川氏は浩然と嘆じて、日本人は家康入国と少しも進歩してゐない。(中略) 魂は慶長以後幾何も経つてゐないやうだと語つたことがある」(第2回)。

他に1927年発表と思われる作品は、連載評論「プロ文学論に就いて」(紙名不詳―全3回)、評論「迷へる文学」(紙名不詳、同年8月以降の発表か、回

答「十五歳以下の少年に活動写真をみせしめない禁止法案について」(婦人公論)、短文「自分の顔」(誌名不詳、同誌 36 ページに掲載、「金氏一平」作の似顔絵あり)。

・1928 年発表と思われる作品として短文「無題録」(誌名不詳、同誌 75 ページに掲載)、短文「竹の賦」(誌名不詳、同誌 109 ページに掲載)がある。

・1929 年発表と思われる作品に随筆「近代婦人の種々相」(紙名不詳)、連載随筆「随想四則」(紙名不詳—全 4 回)がある。

・1930 年発表と思われる作品に連載随筆「私の出家に対する非難に答へて」(中外日報—全 3 回※西澤隆二が 11 月 5—7 日付の 3 回にわたり同紙に東光の出家を論評、その反論文)、評論「農村の若き友へ—盆踊に就いての考察」(紙名不詳、「新聞いはらき」か)、評論「農村の友へ送る第二の信書」(紙名不詳、「新聞いはらき」か)がある。また参考回答「短信」今文字(誌名不詳、顔写真入り)がある。

・1931 年 4 月 19 日評論「槐樹社展小評」(九州日報)※同展は 4 月 18 日から同 29 日まで福岡市内で開催。東光は現地に赴いたかもしれない。

・1931 年 5 月 1 日評論「一つの提案」(小学校新聞)「東光改メ今戒光」名。

・1931 年 10 月 1 日随筆「東光から春聴へ」(晃聖)春聴名。「私は筆硯を清めて、熊崎先生に私信を呈した。私は、私の新生涯に向ふに『春聴』といふ新しい『衣服』を頂いた。私は直にそれを法名とした。同時に妻も亦、泰乃と改名して頂いた。」。

・1931 年 10 月回答「宗門学校はどうなるか」(仏教生活)戒光名。

・1931 年 12 月 11 日連載小説「明暗の街」最終回(新聞いはらき)「作者附記」があり「東光改メ春聴」と記載。

・1931 年発表と思われる他の作品に評論「人柱お伽羅について」(新聞いは

らき)題字は東光、背広に輪袈裟姿の写真あり(「四日金曜日」の表記のみ記事枠外で確認可能、随筆「お伽羅物語」(紙名不詳)、評論「二仏教徒の道 仏教マルクシズムの展開」(紙名不詳、評論「仏教青年連盟に就いて」(紙名不詳—全 2 回。文中に連盟の役職として主事今戒光 書記長三輪悌三、賛助員として内務大臣安達謙三、民政党総務中野正剛、代議士後藤亮一、風見章、簡牛凡夫、渡辺泰邦、松浦武夫、三浦虎夫、政友党総裁犬養毅、鳩山一郎、安藤正純、犬養健の名を列挙している)、連載評論「時評らしく」(紙名不詳—全 4 回)がある。

・1932 年 4 月随筆「僧房から」(反響第 11 号※宇都宮で講演の後、日光に輪王寺門跡を訪ね、昼食を共にしたと随想)。

・1932 年 5 月 1 日評論「現代救済策について」(日本仏教新聞)。

・1933 年 6 月の『宗団意識』の項に下記を追記。同誌は 1936 年 3 月の第 31 号までは発行確認済み。同人は東光の他、井上恵行、嵯峨弘、奥村全成、梅田田鈔、福井康順、坂戸智海、山村光敏、林亮天、奥田慈成、田村貴雄、山本照順、信楽真純、落合寛茂。

・1933 年 12 月 17 日の項の出典の『宗団意識』は 1934 年 1 月が正しい。

・1933 年 12 月の『宗団意識』発表作「総括的には 1934 年 1 月発表が正しい。

・1933 年冬以降 比叡山滞在中に土田杏村から「天台イデオロギーについて共に研究したい」との書簡到来(「マルクスのイデオと天台のイデオ」下)。また「同人今春聴は入山以来戒蔵院に如法な生活をしてゐる。講演にラチオに忙しく宗団の宣伝にももつて来いである」(『宗団意識』1934 年 1 月発行第 7 号編輯後記)の記述も残る。

・1935 年 3 月 9 日 東京施無畏講懇話会第 54 回例会(如水会館)で「仏性」を講演。他の講師に清水谷恭順ら(午後 6 時から)。

・1935 年 3 月 24 日連載随筆「マルクスのイデオと天台のイデオ—我善坊に

て」(教学新聞―25、27日全3回)連載第1回で「麻布の我善坊に移り住んだのは先月末のことである。」とあり、同所への転居は2月末と記述している。

・1935年3月30日夜、加藤勘十の渡米送別会(新宿・白十字)に出席(「我善坊から」一)。

・1935年3月随筆「二徒弟の感想」(施無畏講月報第14号)。

・1935年5月頃 新興仏教青年同盟東京支部発会式(小石川・妙清寺)に出席、顧問に就任。※東光が同盟と関わるのは1931年頃で、後に自身が提唱・設立した「仏教青年連盟」と「同盟」との合流を委員長妹尾義郎に申し入れたが実現しなかった等の記述が江口信順の随筆「なつかしい今さん」(中外日報1961年12月26日付)にある。

・1935年発表と思われる他の作品に連載随筆「我善坊から」(教学新聞か―全3回)連載第2回目で妹尾義郎の「新興仏教青年同盟」について評価する記述あり。同名の随筆が『中外日報』にあるが別内容、評論「宗教文学の流行 鬼に喰はれて了へ」(紙名不詳)がある。

・1936年1月か 連載評論「教団の自己批判としての公開状」(紙名不詳―全2回か)※落合寛茂の安楽寺住職就任経緯を詳述。

・1936年4月17日 落合寛茂の安楽寺晋山式(―18日)。

・1936年発表と思われる他の発表作品に随筆「鬼怒川堤」(「新聞いはらき」か、春聴名)、随筆「日本的タルチュフ―真理運動寸感」(紙名不詳、春聴名)がある。

・1940年5月頃 鹿児島出身の作家古木鐵太郎がペンネームを古木鐵也に改名。東光が命名したという。なお1947年9月頃、鐵太郎に戻した。

・1942〜3年か メモ「東亜運命共同体私案」(未定稿、200字詰め10枚)「東春吉」名。

・1945年以前か 未定稿「運命に就いての若干の考察」(400字詰め10枚)春聴名。

・1948年9月10日 この日、弟・文武宅を訪問、田中英光の近況について文武の妻・勝代に相談。

◎1948年10月20日 この日、尾崎士郎が飛田給の東光宛に書簡。「年を同じくし、性格にいささか似かよひたるものあり、共に振奮を病んで今日に到った。君の二十年間が必ずしも空白でなかったということはこれからの十年間にわかるでせう。僕はひそかにそれを期待する。二十八日は必ず一時までにゆきと書き送る。」

◎1948年12月14日 尾崎士郎と面談(12月25日差出の尾崎速達書簡)。

・1948年秋か 『歴史小説』発刊記念講演会(上野池之端・市民文化会館)に高柳光寿、舟橋聖一、辰野隆と登壇。講師の一人だった坂口安吾は無断欠席する(「忘れられない作家」坂口安吾の新盆によせて)。

・1949年8月『日本ユーモア』発表題名は「調布奇譚」、掲載号も8月号が正しい。

◎1950年7月3日の項で、紀藤元々、斎藤兼輔が聴講と書いたが、第1回の講習会には参加していない(2025年6月発行の今家蔵の『茗多石録』依拠)。水谷川忠麿・正子夫妻、中宮寺門跡一条尊昭ら17名が参加。

◎1950年8月27日 神易講習会を千葉の稲毛浅間神社で開催(29日まで)。参加者34名。千葉県神社庁の幹部ら神職が多く聴講。これは東光の妻・きよの母方の実家斎藤家が臼井八幡神社宮司であったことが関係していたと思われる(2025年6月発行資料に依拠)。

◎1950年8月31日の項で、8月1日とあるのは9月1日の誤記。また一条尊昭の聴講も7月3日からの春日大社での講習会が正しい。

◎1950年9月8日の項の易占講習会の参加者は出口常順、吉田秀映、高士秀

山、秋山栄田ら四天王寺関係者、阿倍王子神社宮司長谷川茂、牧村史陽、斎藤兼輔（春山）ら11名（2025年6月発見資料依拠）。

・1951年4月小説「怪盗暗闘祭り」（面白講談）。

・1952年8月19日の演奏会は八尾市職員組合主催、ビゼー「アルルの女」、ベートーベン「運命」など5曲が演奏された（『八尾市時報』63号）。

・1953年4月12日時評「新興宗教の地盤」（産経新聞朝刊）「春」名。

・1953年5月11日の八尾文化人連盟常任理事会は初理事会だった。理事には東光の他、古藤敏夫、天野作太郎、西岡三四郎、三栖元、樋口雪峯、沢井浩三の7人が推薦される（『八尾市時報』81号）。

◎1953年6月7日この日、尾崎士郎が東光宛に書簡。「小生は健康あまりよろしからず。小生が万一のことありたるときは必ず君によって一生の終末を全うしたい。よろしくタノム」と記した。

・1953年8月評論「天台院小史」は東大阪新聞「河内史談」に連載された。

・1953年9月30日随筆「三岸節子氏への手紙」（新日本美術新聞）。

・1953年12月3日の項、音楽会は「井口基成門下生演奏会」と思われる。

・1953年12月31日随筆「林武論」（新日本美術新聞）。

・1953年（月日不詳）随筆「下ガとマネーと女性」（新日本美術新聞）※フジカワ画廊開館記念展を記述。

・1953年発表と思われる他の作品に随筆「ルオーという画家」（紙名不詳）がある。

・1954年1月1日随筆「一九五四年頭感」（東大阪新聞）。

・1954年1月31日評論「津高和一論」（新日本美術新聞）。

・1954年2月随筆「大阪管見」（福助）。

・1954年2月22日随筆「狂気の芸術」（産経新聞朝刊）※東光の手で切抜

きに訂正。正しい題名は「狂喜の芸術」。

・1954年3月25日の項、独唱会は太田美津子独唱会。

・1954年3月28日 江口信順に葉書差出。「今日、妹尾義郎さんからも御便りを頂きました。大いに御奮闘を蔭乍ら慶祝しております。小生は漸く教団に愛想を尽かして仕舞い、実は仏教革新の熱が無くなりました。寧ろ折角、別の角度から何か働きたいと考えて居ります」（なつかしい今さん）『中外日報』1961年12月26日付。

・1954年4月随筆「大阪の味」（味）。

・1954年7月2日談話「四法律施行『七月一日』への二つの意見」（国際新聞）※もう一方の談話は末川博。

・1954年9月20日 この日の梅田画廊訪問は「三岸節子滞仏作品展」（17日）参観か。

・1954年10月21日随筆「二僧侶の感想」（北國新聞朝刊）。

・1954年11月29日談話「門跡は奇形児」（大阪新聞※一条尊昭尼の出走記事内に収録）。

・1954年12月3日 この日の一業クラブでの講演は、さとう5階特別室で午後2時半から「易を語る」を題に開かれた。

・1954年発表と思われる作品には随筆「河内の美女」（紙名不詳、春か）、随筆「彼岸」（紙名不詳、夏か）、随筆「私の本だな 文学、仏教、歴史など手当たり次第」（産経新聞か）、随筆「らくがき雑談 鬼怒川の鮭」（紙名不詳）、推薦文「三岸節子展」（梅田画廊案内葉書）、随筆「コンコルドの広場（三岸節子滞仏作品展）」（新日本美術新聞）、随筆「松方コレクションに就て」（紙名不詳、年末か。東光名）がある。

・1955年3月27日談話「本と私」（毎日新聞朝刊）。

- ・1955年4月21日 天台大師千三百年御遠忌のため檀家と延暦寺へ。
- ・1955年5月10日推薦文「八木一夫の作品」（梅田画廊「八木一夫・新陶展」はがき）。
- ・1955年5月26日連載随筆「聖人の追放者―続『罪と罰』」（中外日報―29日全4回）※4月22日の安楽寺全焼に文中で触れている。
- ・1955年6月2日談話「愛と信仰の生活を」（紙名不詳。記事「人間復活の元尊昭尼 平松陽子さん」内に収録）。
- ・1955年6月14日随筆「月曜随想 美女発見」（大阪日日新聞）※橋本昭子について記述。
- ・1955年6月26日 三岸節子が長男黄太郎を伴いパリから帰国。海路神戸港に帰着。
- ・1955年7月随筆「忘れられない作家Ⅱ坂口安吾の新盆によせて」（紙名不詳）。
- ・1955年7月11日 中外日報用座談を収録（大阪・西区「とよ春」）。
- ・1955年7月17日座談「宗教放送は如何にあるべきか」（中外日報―19日全2回）他に中山太一、福田定一、吉田秀映、西野日溪、森剛、鬼内仙次、金子千丈、岡本博美、清水洪、中瀬尹ら計12名。
- ・1955年夏か 神戸・みなと祭りを見物（本多沛亭と一緒に写真掲載雑誌が残る）。
- ・1955年9月以降 随筆「共力者三栖元君」（東大阪新聞か）。
- ・1955年10月推薦文「『世阿弥に取憑かれた五年』の実績」滝川駿『世阿弥』（大学書房）所収。
- ・1955年10月5日か 随筆「わが青春記 なつかしい悪夢」（紙名不詳、紙齢4726号）。

- ・1955年10月29日 第二回京都仏教徒会議（大雲院仏教会館）で「仏教の現代化」を講演。
- ・1955年11月2日 後に東光と親しく交わる八尾市職員三上幸寿が市会事務局次長から広報課長に異動。三上は『八尾市時報』1956年1月5日号から1958年4月20日号まで編集兼発行人を勤め、東光に対する八尾市による文化表彰の記事などを掲載した（『八尾市時報』169号）。
- ・1955年11月7日評論「仏教教団の生きる道」（毎日新聞朝刊）。
- ・1955年11月14日 後に東光と深く関わる殉国青年隊隊長豊田一夫を警視庁が逮捕。容疑は銃砲刀剣類等取締令違反容疑。1954年12月16日に全国指名手配されていたがこの日出頭。この事件では豊田の秘書丸山毅、同隊組織部長鈴木兼光、同隊戸畑支部副隊長太元良一も検挙された（讀賣新聞朝刊11月15日付）という。
- ・1955年11月27日連載随筆「夜鬼庵随筆」（文化時報―全2回）※連載第1回で夜起庵と夜鬼庵についてわずかながら記述。
- ・1955年11月以降 評論「エルサレムは遠い 私の政治批評」（産経新聞か）。
- ・1955年12月2日対談「師走舌戦 ネオンの街」万代峰子（産経新聞朝刊）。
- ・1955年12月3日 「直枉」発刊1周年記念仏教思想大講演会（午後5時から、相愛学園講堂）で「二仏教徒の感想」を講演。他に金子大栄、安部大悟。同誌は八尾・観智坊に事務所を置いた仏教思想研究会が発刊。
- ・1955年12月3日 小説「河内狸」（新関西）。
- ・1955年12月8日 堺・徳泉庵で午後2時から講演。この日同庵に「禅餘会」が発足。

・1955年12月13日 この日収録の朝日放送ラジオの二元放送出演。他に小倉敬二、渡辺紳一郎。番組は同月18日午後11時から30分番組の「多元放送 ボーナス談義」か。

・1955年12月13日 この日の讀賣新聞朝刊「東西南北」欄の「観光道路（河原盤）」は東光の作かもしれない。

・1955年12月18日 この日午後1時からの大阪文学会について『讀賣新聞』同月15日付朝刊「よみうり抄」では「大阪文学会『明日』例会」と表記。会費50円とある。

・1955年12月発表と思われる作品は短文「三岸節子小惑」（三岸節子滯留作品展御案内）、評論「日ソ国交恢復にあたって」（紙名不詳）※12月13日の番組出演に触れる。

・1955年発表と思われる作品に随筆「別格寺の廃止」（中外日報か）、随筆「ある尼僧のため」（紙名不詳、随筆「おながく随筆」（誌名不詳）、対談「浮気の倫理 第4話」坂本嘉江（紙名不詳）、短文「私の好きな涼線地帯 生駒山」（紙名不詳）、短文「警官の教養を」（大阪新聞）、談話「わたしの道楽」（紙名不詳）、談話「人間あつての戒律サ 門跡破戒 は片腹痛い」（紙名不詳）、推薦文「（無題）」（『大阪方言事典』推薦文、随筆「河内人情」（紙名不詳）、短文「秋に愛誦する」（紙名不詳、西行の歌を紹介、随筆「真実について」（大商）がある。また参考「文壇すぼと 今氏の関西弁被害譚」（大阪新聞、記事「私の新婚時代 おノロケ拝聴 今東光氏 きよさん」（紙名不詳、参考記事「すなつぶ帖 三岸節子の占い」（紙名不詳）がある。

・1956年1月 この項にある畑重嘉は後に、純具象美術協会会員。

・1956年1月14日 この日の徳泉庵での講演は禅餘会行事で午後1時から同4時までの予定だった。

・1956年2月14日 この日の徳泉庵訪問は禅餘会行事での講演。27日に死去した母・あやの追善供養も行った。

・1956年2月28日談話「寛容の態度に敬服」（大阪新聞）※記事「捕えた学校下口を帰す」中に掲載。

・1956年4月12日連載随筆「東西南北」（讀賣新聞朝刊）の東光執筆確定分は以下の通り。4月12日「女にモラルがあるか」26日「露出症」5月5日「女の社会的モラル」27日「笑っていられるか」、7月（文化欄が夕刊に移行）17日「評論と小説」7日「反語的に」8月17日「閨房小説」、掲載日不明の「静かなる革命」。※2013年10月の調査で右記コラムを貼付した東光旧蔵の切抜集が出現した。また複数の筆者が同一筆名で執筆していたことも確認（讀賣新聞朝刊1955年11月18日付「東西南北こぼれ話」欄では執筆者と推定される4名が実名で執筆）。

・1956年5月か 随筆「慈雲尊者」（易学研究）。

・1956年7月4日評論「読者の会議室 観光税について」（中外日報）。

・1956年7月か 随筆「大峰山を女性に開け」（中外日報）※讀賣新聞夕刊7月2日付の記事を引用。

・1956年8月9日 この日付「中外日報」連載社説の題は「結論を出せ」が正しい。

・1956年8月19日か 評論「茶道の古典について」（第二回夏期茶道教養講座プリント）。

・1956年10月推薦文「現代人は古典への道を歩め」（茶道古典全集刊行の言葉）。

・1956年11月1日 武部善人が藤本義一らを伴い東光を訪ねたことは、武部が信濃武のペンネームで刊行した『小説 河内エレジー』（1991年、光文

社)に記載がある。

・1956年11月16日談話「宗門が生んだ破壊者 延暦寺放火・こう考える」(讀賣新聞朝刊)。

・1956年11月18日『中外日報』連載の社説タイトルは「悪の都大阪市」に訂正。

・1956年12月11日 朝日放送で、東京との二五番組の収録後、梅田画廊での三岸好太郎・黄太郎の「父と子の展覧会」へ。黄太郎と面談。

・1956年12月28日随筆「天台院の鐘」(紙名不詳、文化欄)。

◎1956年作成と史料される「株式会社佛教放送文化協会 定款」(今東光宛月日未記入)を今家旧蔵資料の中から漢幸雄氏が発見(2025年5月)。カトリック系聖パウロ修道会が放送局「日本文化放送協会」(後の文化放送)を設立、1952年に放送開始していたこと関係があるのかもしれない。

・1956年発表と思われる他の作品は随筆「さる歳」(大阪新聞)、随筆「大阪の女性像」(大阪新聞)、随筆「供養とは」(中外日報か)、随筆「戦犯論」(中外日報か)、随筆「重光外相」(紙名不詳)、談話「日ソ交渉に望む」(紙名不詳)、随筆「親鸞」(紙名不詳)、回答「悩みに答える 一度は母子心中図る」(大阪新聞)、随筆「宗教的暴力」(中外日報)がある。

・1957年1月1日随筆「三岸黄太について」(新日本美術新聞)。

・1957年1月1日座談「50年後の宗教」(中外日報) 天文学者山本一清、福見淳草、他2名。

・1957年1月24日随筆「悪運つよく 直木賞を受けて」(讀賣新聞夕刊)。

・1957年1月26日記事「訪問 老女の厚化粧さ 隠しきれぬ受賞の喜び」(紙名不詳)。

・1957年1月か 随筆「直木賞を受けるとは」(中日新聞、朝夕刊不明)。

・1957年2月18日随筆「天台院の早春」(紙名不詳、夕刊か)。

・1957年2月20日刊行の『お吟さま』は当初、淡交社から出版されたが、同年4月1日付出版契約書(上巻306ページ掲載写真参照)では契約者が東光と淡交新社社長千政興後の15代宗室となる。その経緯について淡交社社長納屋嘉治は、淡交社社員が自社の偽造手形を使った大刑詐欺事件を起こしたため編集・出版業務を肩代わりする淡交新社が発足した、と説明、さらに「丁度、今東光先生のお吟さまが直木賞を受賞され、これから、その出版も大々的にやろうとしているいわば、一つの節ともなる時であつただけに、これはこたえました。」(日本の伝統文化を現代に生かす出版『オール関西』1971年3月号)と語った。

・1957年2月か 談話「科学の時代に逆行するもの」(紙名不詳)。

・1957年3月10日談話「インフレ悪循環の恐れ」(讀賣新聞朝刊) ※「あす集中スト」記事内に収録。

・1957年3月19日随筆「大阪の橋」(讀賣新聞夕刊)。

・1957年4月15日談話「第三の教室 マス・コミの中のこどもたち」(朝日新聞夕刊)。

・1957年4月序文「小序『涙骨抄』」(中外出版社)。

・1957年7月随筆「二日所長雑感」(ひらけゆく電気) ※同誌は関西電力発行。

・1957年7月、日不明随筆「ハダカがよろし」(毎日新聞、朝夕刊不明)。

・1957年7月4日参考「時の人 青山圭男」(毎日新聞朝刊)。

・1957年7月13日随筆「このごろの若いものは」(毎日新聞朝刊)。

・1957年9月17日評論「既成宗団への警鐘 政治には深入りするな」(紙名不詳)。

・1957年9月29日随筆「原作の精神を伝える 『どん底』を見て」(産経

新聞夕刊。

・1958年4月14日座談「知識の宝庫 十九万円の質問」(ラジオテレビニッポン) ※タブロイド紙。他に三國一朗、酒多博(新日本放送)ロテューサー、一般出場回答者3名。

・1958年4月15日の項、人形劇は「大阪国際芸術祭 ザルツブルグ人形劇団公演」。

◎1958年5月10日の項、「枚方長崎同窓会」は橋会総会(枚方公園)は園で開催(が正しい)。

◎1958年5月15日「この日の日付」と「姫路 岸本宅にて」と万年筆で書かれた東光宮むさ名の書架をバックにした集合写真が今家に残るが詳細不明。岸本は岸本水府かもしれない。

◎1958年8月2日の項の「大谷太字」での学友会行事とは、大谷太字文化講演会のこと(愛知文化講堂で開かれた)。

◎1958年9月1日の項「コースヨー米」は讀賣テレビ開局記念番組で五元中継だった。

◎1958年9月13日の項、「京都学友会館」は、第3回近畿地区信用金庫幹部講習会(京都大学学友会館)で開催(が正しい)。

・1958年10月7日回答「どうすれば現状を收拾できる?」(サンデー毎日・緊急増刊アンケート)。

・1958年11月28日談話「祝皇太子御婚約 女性にはドエライ、ニュース」(中外日報)。

・1958年11月29日 この日付『ハワイ・タイムス』に記事「破門に動ぜぬ今東光和尚」が出たとコラム「なべ 今和尚の破門?と宗門法規」(中外日報12月28日付)が紹介。

・1958年秋「関西ものがたり」(上方情緒 趣味の手帖第9号(秋季号)) ※1957年4月の「関西ものがたり」と別内容。

・1959年1月1日随筆「宗教界の民主化」(中外日報) ※「本杜社長」の肩書で掲載。

・1959年1月13日連載随筆「東光万華経 説法はわが命」(中外日報) 5月23日全29回 ※毎週火曜・土曜連載。

1回衣生活、2回食生活(17日)、3回やりくり(20日)、4回住(24日)、5回政治(27日)、6回長髪(31日)、7回葬式(2月3日)、8回経済(7日)、9回世襲(10日)、10回説教師(14日)、11回文書伝道(17日)、12回電波伝道(21日)、13回宗門大学(24日)、14回次男坊(28日)、15回予言(3月3日)、16回宗教映画(7日)、17回宗教と映画(10日)、18回宗教音楽(14日)、19回仏教音楽(17日)、20回声明(21日)、21回お速夜市(25日)、22回庶民(31日)、23回仏教画(4月4日)、24回壁画(7日)、25回大僧都になって(28日)、26回身の上相談(5月5日)、27回現代人とは何か(15日)、28回仕事は美人を作る(21日)、29回ものごとを正しく知れ(23日)最終回。

・1959年1月21日の和田元への対談は『証券知識レポート』4月6日号用。

・1959年1月23日談話「特集 法衣」(中外日報)。

・1959年1月23日参考「洋服法衣の普及」江口信順(中外日報)。

・1959年2月4日参考「著作権 知らぬが仏」(中外日報) ※角笛欄。

・1959年3月2日 牧村史陽らが来宅、『観光の大阪用対談収録』。

・1959年3月対談「今東光さんの大阪観光放談(牧村史陽(観光の大阪)。なお文末に「次号には大阪弁と喰べものについて」とあり、次号にも続編掲載の可能性がある(未見)。

・1959年4月9日対談「和田完二氏に聞く「和田完二」証券知識レポート」。

・1959年4月9日対談「本当の心のやりとり」福田千史証券知識レポート。

・1959年4月18日談話「当るも当らぬも…易のすべて」(大阪日日新聞)。

・1959年5月29日随筆「退社の辞」(中外日報)。

・1959年7月1日の「ハダカ風土記」は正しくは「今東光のヌード風土記」が正式名称。O.S.ミュージックの開館5周年記念豪華公演と銘打たれ、東光は構成を担当した花登隆と共に演出も手掛けた。

・1959年7月18日の六甲山訪問は「経営者夏季研修会」(関西能率技師協会主催)での講演のため。

・1959年7月発表の「回想 文士の決闘」(新潮)については、改題前の原稿「決闘介添人」(45枚)がある。本文内容は同一ながら原稿1枚目に「新潮6月号」のゴム印が押されているほか、同誌が旧字旧かなづかいを用いたため、そのように修正する指示書きが欄外に残されている。

・1959年9月6日連載随筆「東光人間経」は『北海タイムス』日曜版にも掲載された。全38回で18、19、32、36回のタイトル不明。初回には「序にかえて」が掲載され、37回タイトル「この世相」、第38回(最終回)タイトルが「黙秘権」。

・1959年9月23日 東映ニュース第5号放映。番組内の「東映クイズ」コーナーで東光の飼っているミミズクが紹介される。

・1959年12月15日の金沢訪問では石川トヨペットにも立ち寄った。

◎1959年12月24日の事項解説「大阪文化協会について」補記。2025年5月に今家旧蔵資料の中から漢幸雄氏が発見した同協会内部資料によるといずれも1960年4月20日「ろ作成」によると当時の協会の体制は、東光が事務局長兼務の理事長。その下に事務局長代理兼務の総務部長に中山信一郎(上巻35ページ下段の

中山と同一か)、編集部局長に青木幸次郎、業務部長に林主順、業務部次長に中瀬尹(中清一のことか)、総務部次長に大堀勝、他に市川信雄、久留和子、和田恵津子と囑託者名がいた。なお中山から東光宛の書簡によると、林は履歴書の提出を拒否さらに出動簿にも捺印せず、青木も履歴書提出しなかったことが報告されている。「林からは履歴書を出す位なら協会をやめるとなりました」と中山は綴っている。

・1959年か随筆「刺繍について」(大阪刺繍商工業協同組合機関誌「刺繍」)。

◎1960年5月24日「この日から開催の「大阪文化まつり」については2025年5月」漢幸雄氏が今家旧蔵資料の中から発見した小冊子「第一回「大阪文化まつり」について」によると、その開催目的は「従来ともすれば相互の交流を欠きがちな東西の芸術家、芸能人を一堂に会して多彩な舞台を展開、観客の皆様と共に、新しい舞台芸術の気運を盛上げようとするものであった。プログラムは第一部「土方おどり」(大阪市内の花街在籍の芸妓による総おどり)、第二部「クラシック」(辻久子による独奏、大阪フィルハーモニーオーケストラによる交響楽演奏など)、第三部「ジャズ・パレード」(ザ・ピーナッツ、雪村いづみ、大阪キューバン・ボーイズらが出演)、第四部「コメディ」(花登隆作のお芝居「通天閣は笑つてる」全三場、大村昆、芦谷雅之助ら劇団「笑いの王国」総出演)、第五部「スター祝詞」挨拶、花束贈呈(森繁久彌、浪花千栄子らが日替わり出演)という内容。全4時間を予定していた。

・1960年8月11日の宝塚訪問は星組公演「華麗なる千拍子」「山びと」観劇のため。

・1960年8月17日の京都・都ホテルでの講演は、大阪の化粧品会社「セパン」セパン」の代理店組織である全国セパン会の第6回総会で行った。

・1960年9月7日 文藝春秋講演旅行(文化講演会 講師には菊村到も参加)。

・1960年9月28日の山一証券の会の正式名称は「婦人のための山一M.I.講

演会。演題は「女性雑感」。

◎1960年11月9日の項の東光物産については1961年昭和36(1)月の東光の水間寺晋山式に同社社長の許斐謙亮が出席、記帳。しかし1962年(同37)11月24日にはすでに社名が「株式会社東光」(以下、東光社)に変更されている。社長は同じ許斐で、所在地も東光物産と同じ港又之西久保桜川町23番地、昭和ビル(2025年6月発見の今家資料依拠)。東光社は総合商社江商を通じ米国シカゴに日本製英文タイプライターを輸出・販売事業を展開していたらしい(1963年3月14日付契約書案に依拠)。また同年1月11日付の「日本プリンテス 東光 株式会社」の善後処理に関する申合事項「書類によると、日本プリンテス(東光社と同じ所在地、詳細不明)を清算会社とする」一方、「東光製作所製英文タイプライターの対米輸出に関して東光社がマージンを取得する(同書類には東光製作所の設立に東光社が努力した旨の記述がある)」、「従来通り山陽バルブ又は大倉商事扱いの木材の代理輸入及び販売権の確保を記載しており、同時に東光社在籍の許斐、蜂谷克己(東光の妻きよの甥)らが東光製作所に「移行する旨が示されている。これらの動きには経済サロンの三宅秀明が関わっていたかもしれない。東光社がいつごろまで存続したかは現時点では不明」。

◎1961年1月21日の項、水間寺晋山式参列者は他に、金剛好江(金剛組)、木崎國嘉(医師)、柿谷華王子(毎日新聞)、小倉英一(鮎川、中清一大阪文化協会)、許斐謙亮(東光物産)、池坊専永(華道家元)、松田毅一(歴史学者、今小路寛瑞(相愛学園)、市川左団次(歌舞伎俳優)、吉岡保五郎(建築ジャーナリスト)、堀田欣資(千草)、唐土八三郎(八三郎)、土井憲治(梅田画廊)、小堀光詮(天竺宗)、中山玄雄(天台宗)、瀧藤尊教(四天王寺)、山口孫一(紀陽銀行)、原清(朝日放送)、平井常次郎(朝日放送)、白井史朗(淡交社)、邱永漢(作家)、井伊兼美(美術商)、國田弥之輔(美術愛好家)ら。

1961年3月8日の丸善石油高等工学院訪問は同校の第3回卒業式出席のため。
・1961年3月22日 東映ニュース第84号放映。同月実施された全通労組のストについて東光のコメントを収録。撮影は3月18日か。

1961年8月4日の講演は正しくは、兵庫県三木市で開かれた三木市婦人夏季太学講座で講演した。他の講師に神戸地方裁判所判事の江上芳雄。

1961年8月13日の「ランキー」森光子との座談はラジオ番組内のこと。

1961年9月3日の「金龍会」は正式には「金龍会創立10周年記念式典」で、東光は講演した。

1962年5月3日参考「美女教師が今東光を告訴した！小説『愛染時雨』のモデルと作者の華やかな争い」(週刊実話特報)

1963年2月15日参考「文芸レンズ」河内風土記(今東光「アサヒグラフ」)。

◎1963年2月23日「日産自動車セドリックを自家用車として105万円で購入」。

1963年6月対談「よるめき説法池内淳子(地下)」。

・1963年9月25日 東映ニュース第216号放映。「天ぷら店で株主の作家今東光や数江夫人らと懇談する藤永(元作)さん」収録。撮影は同年8月20日の「稲菊」訪問時か。

・1963年10月の「みみずく和尚と青年社長」(経済サロン)は座談。出席者は奥村綱雄(野村証券会長)、佐治敏三(サントリー社長)、秋山利郎(東洋精糖社長)、藤田一暁(藤田組社長)、藤森真(美鷲商会社長)、坂田時人(坂田商会社長)、赤井和夫(YPO事務局長)。※タイトルは「みみずく」と表記。

◎1964年2月22日の毎日放送番組は、ラジオボーリングで行こう(毎週月曜午後7時半放送、司会川上のぼる、由美あつさ)。

・1964年8月13日の項の「電通」は夏季広島電通大学での講演かもしれない。

い。『広告研究 昭和39年版』（同年12月刊）に東光の講演の抄録「女性の購買心理について」がある。

◎1964年10月随筆『ボーリング礼賛』（天主寺ボーリングセンター友の会・創刊号）。※東光は同センター友の会長として執筆。

1964年12月9日「日本近代文学書展」がいづみ書店で始まる（18日）。その展覧タイトルを東光が墨書で揮毫。

1965年3月26日の東光の誕生会に出席した極真会館関係者は館長大山倍達その他は、中村忠、加藤重夫、芦原英幸、落合茂、松永秀夫、スティーブ・アール、ピーター・マクレーンだったという。

1966年1月随筆「利生の銭」（若い11第45号）※同誌は名古屋テレビ放送が発行。

1966年3月26日の東光の誕生日には辻久子、神坂次郎、牧野十三男、板倉克、吉田秀映・富美子夫妻らが参集。

1966年3月30日 東映ニュース第347号放映。「陸奥の毒舌和尚」収録。中尊寺での東光の読経映像などを撮影。

1966年5月1日の項から本書に計6度登場する「三浦四郎」は三浦義四郎が正しい。登場箇所は下巻人名索引を参照されたい。誤記については天台寺住職菅野宏紹氏に指摘いただいた。

◎1966年6月4日 社団法人義仲寺史跡保存会が設立され、東光は理事就任。

1966年9月25日刊行の『東光毒舌経 おれも浮世がいやになったよ』には常に松本清張の短文「毒舌経」を推薦するが掲載された。

1966年9月、上巻508ページ下段の対談はなまぐさ対談は「なまぐさ対談」が正しい。

1966年「湯川れい子と週刊誌で対談（詳細不明）」。

1967年1月5日短文「幼な馴染」『画業50年記念 東郷青児展カタログ』（1月5日〜11日、東京、銀座松屋）。

1967年1月14日の項、ロッテ友の会の副題は「名士の話を聞く会」。

1967年8月2日の講演は「第17回高松市夏季大学講座」内で実施（高松市主催）。演題は「人生雑感」、午後7時15分から同8時半まで。

1967年9月25日参考「参院選出馬が招いた今家の波紋」（週刊文春。文中で「檀家には大事な議題のときには死ぬなといつてある。だいたい芸術院会員になつて、小説がかけんなんでいうのはとくだいデキがちがうわ」と発言。

◎1967年12月6日の項、津山では津山青年会議所主催講演会で講演。

1967年随筆「味と香」（スエヒロの味第4号）。

◎1968年2月28日の「今東光を励ます夕べ」には小林米三（財界）、関牧翁（宗教界）、司馬遼太郎、湯木貞一（吉兆主人）、池田蘭子、蔭山幸夫（笹川春一代理）、木本一馬（日本土地社長）、中村吉子（河童経）、日野ひろし（後に東光の背広を数多く仕立てる。山田直也の友人）らも出席した。

◎1968年3月26日の項、誕生日会に先立ち、富士銀行八尾支店の竣工式に出席。

1968年6月19日 東映ニュース第463号放映。選挙運動中の東光を撮影。

1968年7月10日 東映ニュース第466号放映。東光の当選風景、川端康成の映像などを撮影。

1968年8月7日 東映ニュース第470号放映。東光の参議院初登院映像。

1968年10月23日 東映ニュース第481号放映。川端のノーベル賞受賞に関連して東光の選挙映像が放映される。

1969年10月5日 この日訪問の「サロンたしろ」及び同月17日訪問の「田代サロン」はいずれも博多駅前の「ステッキサロンたしろ」のこと。『東光

ばさら対談」所収の田中小実昌の回で「今先生に最初にお目にかかったのは福岡でした。博多のステーキハウスみたいなこのオープンときに」（田中）とあることからこの10月5日のことと思われる。この店について東光は同対談で「ストリップの親父の店だわな」と語り、実際『産経日本紳士年鑑』（1970年版上巻）掲載のステーキサロンたしろの広告には系列事業として東洋ショー劇場などの紹介もされている。

・1970年1月10日 帯評「日本人の陰影をみる」『曠野』今村了介（まほろばの会）※同書は印刷を日青印刷が担当（日本青年連盟関係者が経営）。

・1970年1月12・19日 談話「各界50氏 創価学会への直言」（週刊文春）。

・1970年1月12・19日 推薦文「無題」（週刊文春）※記事広告「この人と一週間〈坪内寿夫〉」内で掲載。

・1970年5月2日の名古屋昌作は前日の1日に吾妻らと中尊寺を訪問に訂正。
・1970年11月15日 泉佐野ロータリークラブ主催の講演は泉佐野市民会館で午前10時から開会。

・1971年3月、下巻717ページ下段のチラシ「世界クラシックカーフェスティバル」への掲載内容は推薦文。同フェスティバルは3月5日東京で開催。その後、名古屋、大阪と巡回した。

・1971年4月6日 この日面談の秦良澄とは福井県足羽郡所在の西蓮寺住職。
◎1972年9月26日の項の「今東光書陶展の主な来場者本書及び本補遺で収録した人物を中心に」は次の通り（2025年6月発見の今家蔵「金蘭帖」依拠）。持田信夫、鈴木兼光、田代直也、野口昭子、山口晃岳、藤田幸之、坪島士平、岡田敬次郎、今日出海、桂子夫妻、河野弘子、柳沢棟三郎、今園子、吉田克朗、琴子夫妻、猿仙、橋本春光、加藤賢久、井口徳子、名古屋昌作、杉谷義周、豊田一夫、樋口恵子、山田

栄枝、峯島正行、蟬崎要、田川真善美、澤村三木男、高橋兵郎、安達健一、佐藤佐、水野栄三郎、山田伸吉、岩谷時子、今聖子、後醍醐院良正、牧野十二男、西山幸輝、白井晟一、藤島泰輔、田川博一、田畑慶吉、團伊玖磨、鈴木直弥、瀬戸内晴美、宇都宮泰長、田川融、花田美奈子、猪熊信行、鈴木次郎、戸川昌子、中本洋、椎名悦三郎、田中満儀、原田維夫、富沢多、羽場慈温、岡部冬彦、佐野繁次郎、森定亨、藤江英輔、丸山正一、川島昌雄、四本志朗、丸山泰司、車谷弘、梶山季之、谷川徹三、田実涉、大谷享子、平中蔵子、阪口祐男、片柳忠男、源氏鶏太、末次瑛子、徳大寺公英、中村武志、山川みどり、新橋遊吉、青木功、宮野昇、今村了介、陳舜臣、美津島徳蔵、ヴィンセンシオ山崎、大村彦次郎、岡本太郎、田中小実昌。

◎1972年10月14日の項の夜の会食は『銀座百点』11月号用座談会収録か。

◎1972年11月座談「赤い鬼青い鬼—今東光銀座放談—」（銀座百点）他に梶山季之、樋口進、茂登山長市郎。

・1973年3月20日 東京行きの機内で「大日本どけち教教祖 吉本晴彦と乗り合わせ、その場で吉本から著書『どけち商法』が贈られる。

・1973年3月8日の項の写真（下巻750ページ）の説明から「3月8日」を削除。

・1973年8月20日 愛知県知多郡の内海特定郵便局が「開局百年局舎落成記念」切手帳を発行。「国宝を訪ねて」のページに中尊寺金色堂と同寺華曼を図柄とした二種の切手を貼付し「中尊寺貫主 今春聴」の直筆署名（印刷）を添えた（他に日光東照宮宮司、華嚴宗管長らも掲載）。

・1973年12月1日短文（内容見本推薦文）『選挙の実際林間（今東光を中心とする東光会）』

・1974年2月17日談話「東光和尚毒舌も復活 禪を締めねえ日本人野郎」（タ刊ニッポン）。

・1974年7月25日 「伊藤真乗」の表記については『今東光香真帳』（和綴全2冊）で2か所において使用されていることから準拠した（以降、同）。

・1974年10月28日記事「ザ・チャレンジャー」《行動する顔》第8回「安斎慶子（平凡パンチ）に東光のインタビュあり。東光はそのなかで、安斎には離婚経験があり、双子の二児を持つ母親であることを明かしている。

・1974年12月22日 三木睦子が東光宛に夫・武夫（当時総理）の近況報告の書簡を執筆、差出。

◎1975年2月7日 この日の天台宗海外伝道事業団理事会は第3回目。

・1975年8月30日の次項記載の『蓮華』刊行時期は正しくは1976年7月7日。本補遺の1976年7月7日の項、参照。

・1975年11月27日の項、天台宗ハワイ別院では昼食を、ホテルでは別院開設二周年記念夕食会が開かれた。

◎1975年12月10日の「クロッキー」展の主な来場者は次の通り（本書及び本補遺登場人物を中心に。2025年6月発見の今家蔵「芳名簿」依拠。蠣崎要、白石功、田中満儀、小倉英一、恒子夫妻、柴田鍊三郎、東谷弘、丸山正一、花田美奈子、峯島正行、岡部冬彦、今桂子、小林米紀、早乙女真、風間完、田川融、伊藤真乗、長谷川竜生、田川恵子、島地勝彦、清水聡、牧野十三男、和嶋せい、竹田鮎子、富家宏泰、宇都宮泰長、相澤英之、谷川徹三、設楽敦生、前島不二雄、持田信夫、樺八郎、新橋遊吉、徳大寺公英、三田純市、安西篤子、山口瞳、藤村志保、野口弥太郎、高橋貞郎、針生一郎、小林茂兵衛、河野弘子、吉行淳之介、澤村三木男、原田維夫、吉田克朗、佐野繁次郎、三好淳之、山田栄一、丸山泰司、井口徳子、佐藤佐、江崎眞澄、杉山博、四本志朗、東郷青児、森定亨、重金敦之、藤江英輔、田川真善美、今日出海、宮田雅之、田中小実昌、戸川昌子、秋竜山、谷口豊二郎。

・1976年3月18日 宮内庁御料牧場から山田栄一宛に東光命名の比内鶏十

大軍鶏（本光奴）百羽の発注がある（4月13日納品）。

◎1976年3月 単立宗教法人として1974年11月に認可された普賢寺（大阪市生野区）の総本山、慰霊塔などの建立を目的とする趣意書を、今家旧蔵資料の中から漢幸雄氏が発見（2025年5月）。同趣意書によると東光は名誉僧長として釈尊聴名で記載されているほか、管長に釈奈翁李能嘉、執事長に釈泰然の名前が挙げられている。

・1976年4月推薦文「人柄と技にホレた」秘伝極真空手「大山信達」日貿出版社。※東光には名譽3段の注釈付。

・1976年7月随筆「生きてゐる鈴木彦次郎」（月刊街）。※文中「彼鈴木のこと」が一高生になった初一年の学期はじめ、同級の川端康成、石浜金作、酒井真人等と共に僕の家へ来て以来、と1977年9月のことと受け取れる記述があるが、詳しくは上巻71ページを参照。

・1976年7月7日 日蓮正宗大石寺内事部が『蓮華』臨時号、特集「今東光氏の妄説を破す」を刊行（非売品）。内容は下巻807ページの通りだが、藤川信澄の論文題名は「極道汗説法の詠言を笑う」が正しい。全編にわたって週刊プレイボーイ6月22日号を批判、6月18日、28日と二度にわたり法主日達が高号を問題視していたことが伺える。

・1977年3月1日の項で、斎藤清がビッグヒル新社の社長だったと記述しているが1977年時点の社長は氷川佳助。同社は菊田一夫プロダクションPR部が発展、1965年（昭和40）に発足した。

・1978年8月10日『東光金蘭帖』（1959年）を文庫化、中央公論社から刊行。弟・日出海が解説を書き下ろして寄せたほか、日出海の三女・梨子の夫吉田克朗がカバー絵を担当した。吉田は1943年9月生まれ。多摩美術大学で学び斎藤義重の指導を受けた。当初は造形作家として活躍したが後に版画制作に軸足を置き、

1973年からは文化庁海外芸術研修生としてイギリスに滞在。1999年9月死去。1971年、同じ大学出身の渠子と結婚した。下巻702ページ上段参照。なお同ページで媒酌人を「佐藤義重」と記述したが正しくは「斎藤義重」。

・1985年1月の項、山本富士子寿初春公演の初日は、2日。他の共演者に天知茂、島田正吾、小山明子ほか。

・2023年1月24日『古寺に行こう 24 中尊寺』（小学館）に参考「古寺人物往来 今東光」が掲載される。

・2024年6月 石川近代文学館が『西村賢太郎蔵資料目録』を刊行、東光の色紙2点、短冊1点を収録。

・下巻921ページ最後の行、1871年は1971年が正しい。

・下巻922ページ2行目パール・ランエーズが正しい。

・下巻923ページ5行目（暦は、哥麿が正しい）。

・下巻984ページ 作品一覽「雲道入礼賛」が欠落。1963年11月初出。

・下巻巻末 人名索引「稲垣足穂」の項の参照ページ表記の407は40が正しい。また「今官」の項の参照ページ表記も、6449は649が正しい。

【時期不詳発表原稿等】

・短文「佐渡の旅」大阪の駿河屋宣伝葉書裏面（1960年代か）。

・短文「地獄讀」（別府地獄組合リーフレット）※下巻876ページ上段の「よっこそ『地獄』へ」と同内容か（1960年代か）。

・短文「推薦文」『古代風俗五態 小町人形第一回頒布会』パンフレット（1960年代か）。

・短文「推薦文」チラシ『ワールドA※健康ドリンクで日本産業が発売』。

・短文「本を読むべし」（平河出版社の宣伝文）。

◎漢幸雄氏所蔵の資料から、東光が1933年（昭和7）8月ごろに転居した東京中野・塔ノ山の正確な住所は塔ノ山15、と判明した。1933年（同8）1月5日付消印、山本幸一宛年賀状。また同じく漢幸資料の山本幸一宛1937年（同12）1月5日付消印の東光差出裏中葉書では、差出住所が渋谷区梹田の住所となっていることが新たに分かった。この資料の出現により東光が梹田に転居した時期は少なくともこの葉書差出時点にまでさかのぼることとなり、本書では1937年3月ごろには梹田に転居したが、1937年1月には梹田に転居するに訂正する。

（了）